

軽石 関東まで影響恐れ

漂着の沖縄、漁業・観光に打撃

本州の漁協、警戒強める

小笠原諸島の海底火山「福德岡ノ場」の噴火に伴い発生した大量の軽石が11月下旬にかけて東日本の沿岸部に接近する可能性が出ている。沖縄では漁業や観光に打撃が広がっており、本州の警戒も強まる。軽石は漁船の航行だけでなく、含んだ塩分が漂着先の環境にまで影響を与える恐れがある。回収後の処理方法や処分場所の検討など「大量漂着」に備えた対策が欠かせない。



軽石が漂着した鹿児島県奄美市の海岸（10月18日）

「これまで経験したことがない。手探りで進めるしかない」。10月に大量の軽石が漁港に漂着した沖縄県の担当者は嘆く。汚濁防止膜で護岸近くまで引き寄せ、シヨベルカーですくい上げる作業が延々と続く。県管理の2漁港だけでも撤去に2〜3週間はかかる見通しだ。

8月に噴火が確認された福德岡ノ場は、沖縄など南西諸島から約1300キロ離れているが、噴火によって流れ出た大量の軽石は海流に乗り、約2カ月かけて漂着した。

産業技術総合研究所（産総研）によると、今回の噴火は戦後最大級の規模といい、噴出物は少なくとも約1億立方メートル（東京ドーム約80個分）に上ったと推定される。

沖縄県では24漁港で軽石の漂着を確認し、8漁港で漁船の運航に支障が出ている。船のエンジンの冷却装置のフィルターに軽石が詰まると航行不能になる恐れがあり、取水口が海面に近い小型船への影響が大きいとされる。10月下旬には海上

保安庁の巡視艇が同県糸満市の沖合で訓練中、冷却装置に軽石を吸い込み、航行できなくなつた。

県が36の漁業協同組合に対して実施した調査では、漁船75隻でもエンジントラブルがあり、1000隻余りが出漁を自粛、漁船全体の3割以上に影響が及んだ。鹿児島県でも6漁港で軽石の漂着が確認されている。

沖縄県内ではビーチにも軽石が流れ着き、旅行の日程変更やホテルのキャンセル、マリンスポーツの中止など観光産業へのダメージも深刻だ。

軽石は今後、本州の太平洋側を北上する可能性が高い。

海洋研究開発機構（神奈川県横浜須賀野市）の美山透主任研究員（海洋物理学）がスーパーコンピュータでシミュレーション

をしたところ、11月初旬〜中旬に黒潮に乗って九州から四国沖を漂流し、静岡や神奈川県などに接近する恐れがある。

発生中の「黒潮大蛇行」が、軽石を乗せて沿岸部に近づくと分析。美山氏は「本州でも軽石が一定のかたまりで流れてくれば、港湾内に入るリスクもある」と指摘する。

過去に経験のない事態を前に、漁業関係者らは身構える。

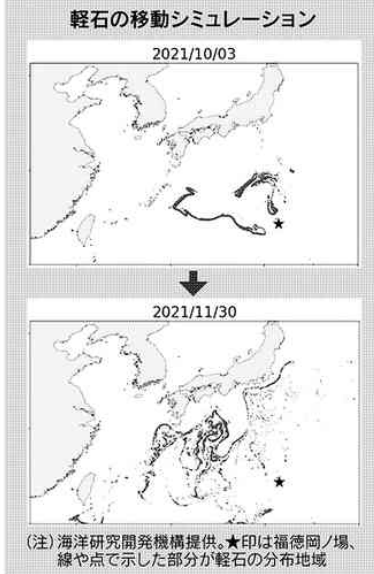
「湘南しらす」のブランドで知られ、相模湾の沿岸一帯にシラス漁師が集まる神奈川県。県しらす船電網漁業連絡協議会会長で漁師の杉山武さんは「これから歳暮やお正月用などで水産物が売れる時期。操業できなくなる事態は避けたい」と危惧する。

シラスは漁船で網をひ

船びき網で取るため、軽石が混じってしまうと「商品にならない可能性がある」（同県の担当者）。シーズン最後の稼ぎ時を前に、行政も有効な手立てを見いだせていない。

10月下旬に解禁された静岡県のサクラエビ漁でも、同様の懸念が尽きない。大井川港漁業協同組合（同県焼津市）の担当者は「初めてのことでどうしようもない」とこぼす。

産総研の及川輝樹主任研究員は「軽石はいつか海中に沈むが、いつになるかは見通せない」とい



（注）海洋研究開発機構提供。★印は福德岡ノ場、線や点で示した部分が軽石の分布地域